



# 福山平成大学

## FDニューズレター No.2



平成 18 年 12 月 22 日発行  
福山平成大学  
FD 推進委員会  
FD ニューズレター  
編集部 編集

## 授業研究会の新たな地平

福祉健康学部 大谷 まこと

12月14日、第二回「私の授業」発表会が行われました。今回は教授会に続いての発表であったため、ほとんどの教員の参加が可能となりました。「大学全体への開放」、「多数の参加」という当初の目標が二回目にして実現でき、さらなる展開が楽しみです。

### 目的意識の早期確立

動と静、雑念の生じる余地のないリズムカルな授業展開と心奥から言葉を引き出してくる問いかけ。お二方の一見対照的な「授業」でしたが、どちらも学生に対し、自分の将来にとって重要なステップのひとつであるという自覚をもたせることに成功していて、それにより教員と一体になった授業が可能となっている、という点において共通するものがありました。

### 学習者の将来を拓く

島田先生の授業については、大学での日本語教育という観点から大変啓発されるものがありました。中国の方はなかなか助詞（英語の前置詞も）を使いこなすことができず、そのため就職後、実力を十分に評価されにくいという問題を抱えています。しかも、日本語にはまだ学問的に解明されていない助詞の使い方が多数残っています。日々多くの語彙や表現に触れることのできる留学生に対し、語彙・表現文型・類義語ではなく、あえて助詞に注目させ、高度な内容を持つ文章を丸暗記させる指導法は、中国留学生のための日本語教育として合理的であり、学生の将来にとっても大変有効であると思いました。

### 心奥への問いかけ

梶原先生の授業はその内容の重さと先生のお話、そして極限状況に置かれている母と子の悲しみと勇気に心を揺さぶられる思いがしました。当事者の話（職業としている方の話も含めて）は、社会福祉系の大学において学生を非常に引きつけるもののひとつとなっていますが、カリキュラムへの組み込みはまだあまり行われていません。梶原先生のような事前・事後のフォローを前提に、もう少し実施してもよいのではと思います。また、学生のPTSDへの配慮は、社会福祉の領域でも必要であると気付かされました。

最後に、「私の授業」発表会は単なる教える技術の学びを超えて、知の楽しみともなり、学際的な研究の契機ともなり得るものであると思いました。

## 看護実践事例から学ぶ

福祉健康学部 梶原 京子

### 養護教諭の履修科目

健康スポーツ科学科の2年次生から、養護教諭一種免許状取得が可能になりました。

看護学10単位の取得要件があり、その中のひとつとして「保健看護学概論」の授業が始まりました。学生にとっては、「養護教諭になるのになぜ看護?」と疑問を持ったかもしれません。ナイチンゲールの「私はほかによい言葉がないため、看護という言葉を使う。このことばは、今でもせいぜい薬の管理や湿布を貼ること以上の意味はほとんどもたないできた。だが、看護は新鮮な空気、光、暖かさ、清潔さ、静けさを適切に取り入れ、食事を適切に運び管理すること、そして、これを極力、対象者の生命力に(後略)」という学びをすることで、「看護って身近なことなんだ」と感じたようでした。現在では、多くの看護理論家がでていますし、エビデンスに基づいた質の高い看護の実践を目指してすすんでいます。

### 具体的な授業展開

グループワーク、看護実践の事例講話、基礎知識の講義・演習、による授業展開を考えました。

グループワークで、「私たちの考える看護とは何か」について討議し、一枚の図解にまとめ、作成したものを発表する授業では、グループメンバー全員でいきいきと取り組んでいました。

看護実践の事例は、概念だけでなく直接体験された家族の体験談を聴講することで、看護を総合的に学ぶこと、将来の養護活動において、児童生徒の疾病や死にいたる過程に遭遇したり、その家族に関わったりする際にいかすこと、などを目的に行いました。講話テーマ『「お母さん、バイバイ」白血病と闘った十年八ヶ月』は、私語もなく聞き入っていました。事後の感想には、話していただいたことへの感謝が多く書かれていました。

看護に関する基礎的知識はどうしても必要だと思い、プリントを配布したり、パワーポイントを用いたり、ビデオ視聴をしたりして説明と演習ですすめていきました。赴任1年目で学生対応に不慣れなため、これらの方法の時は、毎時間反省ばかりしていました。次年度の課題です。

### 講話の導入

養護教諭資格取得希望の学生31名で、初めて、看護学概論を教えるため、学習に取り組む姿勢に疑問がありました。講話を聞くことで、生と死や看護すること、人を援助することなどに、興味と関心を持っていることが理解できました。また、事前事後の調査にも協力的でした。事前の質問が60項目であったものが、事後の感想が274項目に増えたことは、話に心から聞き入っていたことの表れだと思われます。

本授業については、早い時期(2年次)に取り入れることが、今後の看護・養護関連科目に関心を持って取り組んでいくことにつながると考えるので、今後もこの時期に継続して取り入れたいと考えています。

また、講師の講話内容については、事前に連絡をとり、対象学生や授業の目的などについて連絡を取り合うことは必須です。今回は特に行いませんでしたが、死別経験者への配慮を考慮しておくことも必要です。

さらに、授業は講師招聘であっても、学生の関心を高める事前の働きかけと、事後のまとめをして評価するなどが、大切であることがわかり、今後も実施する際の課題として考えていく予定です。

#### 授業の様子

「私の中にいる二人の母親」



私語なく聞き入る学生たち

## “生命の輝き”を学生さんに！

福祉健康学部  
共通教育担当 島田将夫

### 生活の処方箋

「看護って身近なことなんだ」と学生さん一人一人の心の底まで響いていることが確かな感触として得られる授業でした。それもそのはず、梶原先生は選りすぐりの実践事例や講話を学生さんに与えつつ、グループワークや講義・演習を進めるようにご配慮なされておられたのです。看護は自分とは全く別の世界のことと思っておりましたが、授業観察者というよりも学生の一人として授業に参加させていただいた私は、まさに目から鱗が落ちる思いを体験いたしました。保健や看護は、それに携わる専門職の人々をみの実践ではなく、「生活の処方箋」を描いて実現させることだったのです。ここに、梶原先生の授業で拝見し、学生さんが体得したであろうと思われることを私の偏見を通して要約させていただきます。

### Nursing：生きる力

「生命力の消耗を最小限にする（＝生命の持てる力を最大限に生かす）」、これが梶原先生にお教えいただいたナイチンゲールの nursing の考え方の一つです。看護といえば日本では病気や怪我の患者のみが対象者としてすぐにイメージされますが、そうではなくて生命すべてに働きかけるのが nursing（すなわち看護）なのだということを学生さんたち自らが実感を得るよにとの工夫をなされていました。身近な事例から掘り起こして、「私たちの考える看護とは何か」の討議を重ねて、学生さんたちは、自分たちは皆 nursing を受けて今日の自分の生命があり、同時に他者に nursing をすることによって自己も生きる喜びを与えられてきたのであるということにより強く確信を持つことができるようになっていった様子でした。そして何よりも、まずは自分自身が自己の最良の看護人でなければならない、という認識にまで到達することができていたようです。身近な事例の討論より、nursing は“生きる力”の源として人間に自然に備わった心の働きであることの認識を学生さんが形成していくのがよく分かりました。

### QOL：生命の輝き

看護が身近なものであるという認識を十分に得た上で、梶原先生は事例講話を学生さんに与えられました。幼い娘さんを小児癌でなくされた方の講話です。そこでは、病気と闘う幼い娘さんの生命を支えようとするお母さんを見ると同時に、お母さんの生きる力が日増しに強くなることを見ることができました。看護は一方的なものではなく、それを受ける側も与える側も共に生命が輝くことを見ていたに違いありません。体験者本人の講話を通じて、看護の実践はQOL(quality of life)の向上、それはすなわち「生命の輝き」の向上に他ならないと学生さんが見ることができたに違いないと強く感じました。ここまでに学生さんに看護の視点をお教えになられた梶原先生は、“生命の輝き”をすべての学生さんにお与えになられたのです。

### 看護の視点をすべての学生さんへ！

本学の建学の精神に「…生命を尊び…」という部分があるのは周知のとおりです。ならば、看護の視点を身につけることで最も身近で確かな「生命の輝き」を体感できるのですから、学部学科を問わず本学学生さん全員に一度は看護を真剣に考える機会を持ってもらうべきであると強く感じさせられる授業でした。

## やる気、根気、暗記

福祉健康学部

共通教育担当 島田将夫

### 語学の“3き”

「実用日本語Ⅱ」を担当して3年目になります。外国人留学生の新たな飛躍に資するべく日本語の訓練を行う授業です。ところで、「外国語を身につけるには“3き”だよ」とおよそ25年前に私は教えを受けました。以来、語学の達人としても名高いその先生のお言葉を信じ、外国語習得はこれ以外を絶対に信じないことに決めました。“3き”とは“やる気”と“こん気”と“暗記”です。外国語としての日本語のトレーナーをつとめるに際しても当然、私は“3き”の実践をひたすらに推進するのみです。(後に知ったのですが、この“3き”は旧制高校の多くでは常識だったそうです。事実、旧制高校ご出身の方はすごく外国語ができる、なるほど「道理」です。)

### 日本語母語話者を圧倒する日本語力

本学には現在、90名余りの外国人留学生が日本語“で”勉強しています。元留学生の卒業生は30名近くいますが、多くが日本企業もしくは日本企業との取引のある企業に就職いたしました。そこで期待されるのは第一に日本語能力という場合が多く、逆に日本語能力が比較的乏しいと、本人が強く希望しても日本関連の事業で職を得ることができませんでした。そのこともあって、本学が留学生のために開設したのが「実用日本語」なのですが、すでに大学教科が履修できるほどの日本語運用能力があるのですから、あえてその上に積み上げようとする日本語の能力は当然ながら高レベルのものが期待されます。履修生も「日本人のように日本語が話したい」と“やる気”は充分、でもそんなに甘いものではありません。私の授業ではその遥か上の段階、「日本人を圧倒する日本語」を身につけてもらうことが目標です。少なくともそのための訓練方法（見通し）を身につけてもらいます。やり方は簡単です。なるべくたくさんの有益な日本語文章をそのまま丸ごと暗誦してもらおうのです。



### 只管打読

さて、暗誦です。暗誦は暗記の包括的な実現です。暗誦のやり方は色々あります。その中でも私の推奨する方法の一つは「只管打読」、ただひたすらに音読することです。全く何も考えずにひたすら読めばいいだけで、何度も何度も何度も繰り返し繰り返し繰り返し、同じ文章を読んでいくのです。憶えようとして読むと苦勞するのですが、この方法ならいつのまにか気がついたら憶えてしまっています、少なくとも100回ぐらい真剣に読めば。しかし、「只管打読」は単調すぎるせいか、その効果を経験しないうちは苦痛が大きいようです。そこで授業では、様々な“記憶補助”を出して、学生さんに注意をわざとそらさせておいて、知らないうちに何度も何度も読ませるように仕向けています。やがて音読にも真剣身が増してくると、対象となる文章への全身での“共振”のごとくになってきます。共振とも思えるほどに読み込むと、暗誦はいとも簡単です。暗誦した文章はそのままでも“体系知識”ですから、その知識部分だけでもその知識のない日本人を圧倒できますし、創作も自然にできるようになります。あとは“根気”よく暗誦できる文章の総量を増やしていくのです。そこで繰り返し、“やる気、根気、暗記”、やっぱり語学は“3き”に尽きるのです。



## 集中して取り組む留学生たち

経営学部

共通教育担当 市瀬 信子

### 授業の概要

今回参観させていただいたのは、2年次留学生を対象とした必修科目「実用日本語Ⅱ」でした。授業の内容は、日本語で書かれた長文（「贈り物」というタイトルの随筆）を題材に、島田先生が文章を朗読し、学生がそれを聴き取って書き写し、その後先生から配布された正解文と照らし合わせて自分の書き取った文章に訂正を加えた上で、音読し、暗記し、最後に全文を先生の前で一人一人暗誦すると、というものでした。

### 授業の様子と学生の表情

島田先生の朗読が始まると、教室中がしんと静まりかえり、先生がよく響く朗読の声と、それを書き取る鉛筆のカリカリという音だけが教室内に響き渡ります。学生が一言も聞き逃すまいと集中しているのが、こちらにも伝わってきます。それぞれの書き取り能力に差は有るものの、全員が最後まで諦めることなく、人に頼ることなく、自分で課題を仕上げていきます。教室は静かな緊張感に包まれていました。

与えられた課題文は、A4用紙いっばいの長さで、日本人でもこれだけの長さの文章を暗記できるだろうか、と思わせるものなのですが、最後には全員が先生の前で暗誦してみせました。島田先生は学生一人一人に訂正を加え、言葉を掛け、出来具合をチェックしていきます。暗誦し終えた者から次の課題へ進め、課題の積み残しが多くなると補習を受けなければならないこともあるので、皆必死ですし、暗誦し終えた学生は、これだけの文章を暗誦したのだ、という達成感がその表情に表れています。

### 授業の特色

**計算された授業構成** 聴き取る、書き取る、意味を理解する、音読する、暗誦する、というトータルな語学学習の要素を一時間の中に全て取り入れ、しかも学生個々人の力も把握できるという、実に計算され工夫された授業でした。

聴き取りの時には、ただ書き取らせるだけでなく、「は」「が」などの語が合間に入った空欄つきの用紙があらかじめ準備してあり、書きとりのヒントを与え、文の構造を教える仕組みになっています。暗誦の時にも、同形式の専用シートが準備してあって、それを見ながら暗誦させます。ただ暗誦せよ、では諦めてしまう分量の文章も、こうした工夫で学生は最後までこなすことができるのだと感じました。一時間の授業中、私語は全くなく、怠ける者もなく、学生一人一人が集中して授業に取り組んでいて、教室内は実に気持ちの良い雰囲気なのですが、その裏には、授業の準備のよさがあることを切に感じました。

**学生のレベルの把握** 最初はここまでできなかった、という島田先生のお話を聞きました。学生のレベルを理解した上で時間をかけてここまで力をつけさせてきたとのこと。学生のレベル把握の着実さが授業の充実につながっているようです。学生自身も自分の成長を実感しているようで、学生の明るい表情が印象的でした。

### 今後への要望

留学生は、「実用日本語」を1, 2, 3年次にそれぞれ必修として学んでいますが、3学年にわたるそれぞれの授業の連携はとれていません。今回、2年次で何を勉強しているのかを知ることができ、3年次担当の私には非常に勉強になりました。今後は3学年の同科目の担当者が連絡をとりあい、学習情報を交換して、より学生に有益な授業を構築してゆくことができれば、と思いました。

# 九州、宮崎の地にやる気の大学再発見

宮崎女子短期大学 視察報告

福祉健康学部 藤井 悟

## 本学と似た規模の大学

猛暑の8月末、私と三好先生は、本学FD委員会活動の充実及び教育内容の充実に資するため、宮崎市の郊外にある「宮崎女子短期大学」を訪れた。ご承知のとおり、この短期大学は平成15年度文部科学省の「特色ある大学教育の支援プログラム」に採択された特異な大学である。

休暇中にもかかわらず、同大学の学長補佐である宗和太郎教授（前・FD委員会委員長）と塚本泰造助教授（現・FD委員会委員長）が大学の玄関先で出迎え頂き恐縮した。

同大学は昭和40年に開学したもので4年制の宮崎国際大学を併設しており、学科としては保育科、初等教育科、音楽科、人間文化学科、のほか専攻科として福祉専攻科、音楽療法科がある。学生及び教員数は短大でありながら在籍学生900名、教員45名とやや本学と類似した規模である。

## 「日本一の地方短大」をめざす

### 取り組みの経過

平成10年より「日本一の地方短大」をめざし、全教員参加のもとFD活動への取り組みを開始し、平成12年21世紀に向け、全教員でこれを採択し、学内外に発表している。以降、毎年度始めに自分の教育実践において努力したい事項を3項目設定し「FD宣言」として示し、学生に向けて公表している。



## 視察の疑問と所感

### 1) 何故ここまで徹底的に「FD活動」が徹底できたのか

背景には、地方短期大学の危機意識があったと思われるが、学長の強い支持のもとFD委員長以下、委員が一致協力して推進したことが大きい。学内には各種の委員会が構成されていたが、FD委員会を中心に据えられているように思えた。それだけ、「教員が変わらなければ、大学が変わらない」という信念に燃えていたのかもしれない。

### 2) 本学ではどこから手をつけるべきか

一言では難しいが、宮崎短大のように、「やってみたい・やればできそうな目標」を設定することではなかろうか。「ローマは、一日にしてならず」のことわざの如く、本学の学生や教員の現状を踏まえた上で、一步一步、実践を積み上げていくしかない。少なくとも次のような課題は当面の検討課題となるだろう。

- (1) 授業参観の実施 または「私の授業方法」研究
- (2) 学科別の「授業研究会」の開催
- (3) FD委員会の委員会構成の再検討、委員会の位置付けの強化

# 日本一の地方短大を目指すパワーの源とは

宮崎女子短期大学 視察報告

経営学部 三好 宏

## 半端でないFDへの取り組み

宮崎女子短期大学のFDへの取り組みは半端でない。例えば、教員が毎月関わる活動は、FDミーティングや授業研究会など計4種5回にも及ぶ。さらに、年5回の教員相互授業参観と1回の自身の公開授業が課せられている。もちろん、全教員が、である。

はたして、これほどの取り組みを平成12年から実施してきたパワーの源はどこにあるというのだろうか？

## パワーの源＝教員の自発性

おそらくFDを義務化しても、中身のある継続は不可能だろう。教員自ら主体的に関わろうとする動機づけが必要である。事実同短大も、初めの2年間は委員が教員に声掛けしてもそれほどの効果はなく、義務感と自発性の狭間でさまよっていたと言う。

教員がやる気になることは何か？ それを考えるとところから再出発した活動は、学生が卒業時笑顔で「この学校でこんなに成長がすることが出来た」と言ってくれるのが全教員に共通する願いだ、ということにたどり着く。学生が喜んで卒業することは、教員にとっても喜ばしいこと。そこから、それをさらに高めるための努力をしようという気持ちにつながっていく、と考えたのである。学生の満足度をアップさせる活動がFDなのだが、見方を変えれば「教員の自己充実度」をアップさせる活動でもあるわけだ。



## FD活動は教員同士の人間関係づくり

しかし、そうした取り組みも一人の教員が簡単に出来ることではない。委員会は、教員に対し、何のようにすればよいのかという様々なメニューを用意する。しかも、それらを教員同士が進んで協力し合いながら実行していくという体制の構築にも力を入れた。概して疎である大学の人間関係をいかに密にしていくのか。宗和前委員長がいみじくも語るように、「FD活動は教員同士の人間関係づくりでもある」という言葉は、強く心に響いてきた。

## 私たちの進むべき途は？

FDとして何をするかは重要。だが、教員間の人間関係をいかに構築していくのかということと一体で考えないと、全学的なFDは難しいのだろうか、というのが今回の視察で得た率直な感想である。

## FD推進委員会活動記録

平成18年5月11日	平成18年度第1回委員会 議題 1) 1年間の活動について 2) その他
平成18年6月8日	平成18年度第2回委員会 議題 1) 1年間の活動について 2) その他
平成18年7月13日	全学教授会報告 報告事項 1) 「学生の顔と名前を覚えよう」運動 2) 「私の授業」発表会 2006年度版学生写真台帳CDを全教員へ配付
平成18年7月13日	平成18年度第3回委員会 議題 1) 年間活動について 2) その他
平成18年7月20日	経営情報学科「私の授業」発表会 発表者 (1) 授業報告者 福井正康 参観報告者 三好 宏 (2) 授業報告者 小篠敏明 参観報告者 島田将夫
平成18年9月21日	FD ニュースレター創刊号発行
平成18年9月21日	平成18年度第4回委員会 議題 1) 後期活動方針について 2) その他
平成18年11月20日	平成18年度第5回委員会 議題 1) 「私の授業」発表会実施計画について 2) その他
平成18年12月14日	「私の授業」発表会 発表者 (1) 授業報告者 島田将夫 参観報告者 市瀬信子 (2) 授業報告者 梶原京子 参観報告者 島田将夫 司会者 三好 宏
平成18年12月22日	FD ニュースレター第2号発行

### 編集後記

FDニュースレター第2号、何とか年内発行にこぎつけることが出来ました。これもひとえに、年末のあわただしいなかでちゃんと期限内に原稿を届けてくださった寄稿者の皆様のおかげです。心よりお礼申し上げます。

FD委員会の一年の活動を回顧いたしますと、前半は進むべき方向を模索して、いたずらに時を浪費していたように思います。後半になって、ようやく一つの方向が定まり、一歩足を進めることが出来ました。

来年はさらに力強い足取りになりますように、委員一同、更に精進致す所存です。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

今年も残り少なくなりました。皆様おそろいでよいお年をお迎えくださいますように。(T.O.)